共に生きる

佐藤キミ男

昨年の五月、東京都板橋区の住宅の一階に、障碍のある子どもたちのための放課後クラブとして、「はすねっこ」は誕生した。開設からまだわずかな時間しか経ていないが、そこでは、訪れる子どもたち（小学校一年生から高校三年生）と、保護者と、高校生、大学生、社会人といったさまざまな年齢のボランティア、そして職員との日々新たな出会いがある。

出会い（T夫の場合）

その年の夏休みの初日、T夫は初めて「はすねっこ」を利用することになった。半袖のTシャツに長ズボン姿のT夫は、一見して標準的な中学一年生であった。

ところが、長ズボンの裏地はフリース素材、その上、白いソックスを三枚重ね履きしている。ぷ～んとほのかに体臭がした。

部屋に入るなり、T夫は、CDを大音量にし、部屋の中を行ったり来たり、走り始めた。エアコンが多少効いているとはいえ、季節は夏である。T夫のTシャツはすぐに汗でびしょびしょになり、部屋は、ますますT夫の汗のにおいで満たされた。

「新しいシャツに着替えない？」

スタッフが促すと、T夫はそれに応じて着替えるが、再び同じように部屋の中を走った。

私は、T夫の行動に正直戸惑い、しばらくは静観し

ていることしかできなかったが、T夫の行動を見守るうちに、だんだんと彼から発せられるメッセージを感受できたように思った。T夫の行動は、決して衝動的ではない。初めて訪れた新しい場所で、安心できる自分の「居場所」を必死で探しているのだ。

ありのままを受けとめる

翌日から毎日、朝九時から夕方の五時までT夫は「はすねっこ」で過ごすことになった。依然として、部屋の中を走ることがメインで、これといって好きな遊びが見つからずに過ごしていたが、それでも少しずつ落ち着いてきたある日、突然T夫の大声が聞こえたので、驚いて見にいった。どうやら、スタッフの一人が、相変わらず何足も重ねて履いている靴下を無理に脱がせようとしたらしい。靴下の重ね履きをT夫の「こだわり」ととらえたそのスタッフは、「こだわり」を取り除いてやることで、T夫がもっと楽に過ごせると判断したようだ。T夫は激しく抵抗し、こぶしでそのスタッフを一突きし、大声を上げながらトイレに逃げ込んだ。程なくトイレから出てくると、決心したように靴下を脱ぎ、そのスタッフに足を洗ってもらった。けれど、翌日からも、T夫は靴下の重ね履きをやめることはなく、多い時には五枚以上重ねて履いてくることもあった。

「こだわり」は、その時の子どもの「内なる叫び」である。スタッフの行為はT夫を思う故のことであったが、強いられると嫌でも受け入れてしまうT夫に、私は危うさを感じた。ありのままの表現をありのままに受け止めることで、T夫を理解していきたいと私は考えた。

居場所は人がつくる

T夫は一人で過ごすことが難しかった。必ずスタッフの誰かを自分の傍らに置いた。男性スタッフではなく、女性のスタッフを好んで選んだ。初めて訪れたボランティアの中に、若い女性がいようものなら、強引

に自分の横に引き寄せる。選ばれた人は、T夫の意思のとおりに動かされ、自身の意思は封印せざるを得なくなる。そうしないと、T夫がパニックになってしまうからだ。言いなりになってくれそうな人を傍らに置き、必死で自分を守ろうとしているT夫の思いを理解しつつも、選ばれたスタッフはたまったものではない。「はすねっこ」は、子どもにとっても、大人にとっても、心地よくいられる場所であってほしい。T夫とのかかわりについて、スタッフで話し合った。

「T夫のかかわりはいつも一方的」「T夫が一緒にいることを望む場合だけで、T夫が人から望まれて一緒にいることはないのでは…」という話題になった。

一人の女性スタッフを中心にして、T夫と積極的にかかわってみることになった。T夫の言いなりになるのではなく、T夫の気持ちを全面的に受け止めながら、T夫が、一緒に暮らす相手の存在に気づいていくことができるようなかかわりを、スタッフみんなで意識した。

つながるということ

T夫は、他者との力関係にはとても敏感なところがある。特に、通っている学校での教師や友人との関係は、T夫の日常生活に大きく影響している。どうしてもかかわりが一方的になりやすいために、クラスメートから理解されずに拒絶されてしまい、そのことでT夫も傷つくことが多い。自分の思いが、なかなか相手に伝わらないもどかしさをT夫はつねに抱えている。

「佐藤さん、鍵（ちょうだい）」

ある日、T夫が私に言ってきた。

私は名目上「はすねっこ」の代表ではあるものの、保育ではほかのスタッフと何ら変わりがない。しかし、T夫は最初から、私とのかかわりに少し距離を置いているところがあった。T夫が自分の気持ちをこんなふうに表現してくることは珍しかった。

私はポケットに手を突っ込んで、鍵の束を取り出した。「違う」とT夫が言う。

最近、小学五年生のR夫が鍵に興味をもっていて、この鍵の束を持ち歩いては、事務室のドアを開けたり、閉めたりしている。T夫は、このR夫の姿をよく見ている。てっきりこの鍵の束だと思ったのだが、違っていたらしい。

もしかしたらと思いながら、再び取り出したのは、玄関のドアの鍵である。

「これ?」と言いながらT夫に見せると、「そう」と応える。

私は一瞬、躊躇した。部屋の中の鍵と違い、玄関のドアの鍵は、なくすと厄介だ。

しかし、T夫がわざわざこの玄関のドア鍵を私に要求するのは、T夫にとって、何か大切な意味があるからに違いない。私は思い切って、持っていた鍵をT夫に手渡した。

鍵を手にしたT夫は、安心したように、にこっと笑うと、そのまま自分のズボンのポケットにしまい込み、再び遊び始めた。

それ以降数日、T夫は、「はすねっこ」に訪れると玄関のドアの鍵を要求し、帰る時には、私に手渡すということを繰り返し行った。玄関の開け閉めにその鍵を使うことはなかった。使わずにひたすら持ち続けているのは、この鍵のもつ意味と、この鍵を持っている人の役割をT夫が理解しているからであろう。鍵を通して、スタッフとのつながりをつけ、その中で、「はすねっこ」での自分自身の存在を確かにしているのかもしれない。

T夫の表現を支える

「はすねっこ」の数少ない玩具の一つに、レゴ（デュプロ）ブロックがある。T夫は時々、このブロックを使って創作をするようになった。短時間で作る時もあれば、じっくりと時間をかけて作る時もある。作り上

げてから、しばらくは、「銃」として撃つまねをしたり、護身用として持ち歩いたりする。その後は、ブロックの隙間を部屋に見立てて、「ここは、佐藤さんの家」「ここは、○○さん（スタッフの名前）」「ここはぼく」と、T夫やスタッフが住んでいる「集合住宅」となる。

ひとしきり作ったもので遊んだ後、机の上や棚の上に、お守りのように大事に置く。誰かが触れて形が変えられてしまったり、壊されたりしようものなら、かっとなって、椅子を投げようとしたり、机を倒したりと大騒ぎになる。触れた相手の子どもに本気で向かっていくこともあるが、ほとんどの場合は、自分の手で作品を壊してしまうことが多かった。

そのたびにスタッフは、T夫をなだめ、T夫に余裕がある時は、もう一度一緒に作り直した。このようなかかわりを続けていく中で、T夫も少しずつ変わっていった。自分の作品の形が変わったり、壊されたりしても、怒らずに、「第二号作る」「第三号に挑戦」と言いながら、その都度新しい作品を作り出していくようになったのだ。

ブロックは、T夫が唯一、自ら始める「表現活動」と言ってもいい。T夫にとって、自分が作った作品はまさに「自分自身」である。友達とのかかわりの中で、時には傷つけられることがあっても、助けてもらったり、助けを求めたりしながら、もう一度自分を立て直していけるような関係をここではぐくんでほしいと思う。

「はすねっこ」では、特に活動プログラムをつくってはいない。限られた環境の中ではあるが、子どもたちは、自分たちの好きなことを見つけ、自分たちのペースで過ごしている。子どもたちが「はすねっこ」に自分の居場所を見つけ、安心して過ごすことができるようにと願う。彼らがここで生き生きと暮らし、学校や家庭と良い形でつながっていくことができればと考えている。

（障がい児放課後クラブ　はすねっこ）